

# 秘事は暁なミュージアム研究の新地平

現代メディア論を援用した新たな理論的枠組みの素描

「読者の誕生は、『作者』の死によってあがなわれ」との「物語」がある。一九六〇年代に書かれた記号論者ロラン・バルトによる有名なお話だ。そして、本書が描く二〇世紀のミュージアム史の過程にもまた、この「物語」を彷彿とさせるくだりが読める。いわば「来館者」の誕生というべきか。記号論を援用する英国のミュージアム研究者が、「展覧会をテキストとみなすことで来館者を読者として発見」（二〇四頁）した越境的視点ゆえの成果が発端となった。つまり、「作者」たるキュレーターが発信する完成されたメッセージを、線条的かつ一方的に解釈すべく「学習／鑑賞」するそれまでの「受動的来館者」像から、展示会という「テキスト」の場において、むしろ「来館者」の側から、その経験と文脈によって、漸次意味を生成する新たな「能動的来館者」像への力点の移行である。教育的観点からみれば、なるほど、知の民主化の点に加え、学習者の主体性を重視する理念において、この「来館者優位」は理想的というべきであろう。

一方、「能動的来館者」は、価値相対主義に陥りやすい。真正性の所在が不安定なる地盤の上で、さらにミュージアムは、八〇年代以降の公的助成の減少の現実に直面すると、一気に顧客主義へと傾斜し、娯楽産業化の性格を強めていく。このような状況を批判的にとらえる反動もまた館内外から噴出する。

ミュージアムのあり方をめぐる議論の場では、総じて、かかる「娯楽—教育の軸線」（二六頁）が前景化し、それゆえにというべきか、先は隘路となる。留意すべきは、そこで前提となっているのが、われわれの内でのミュージアムと教育との強い結びつきの信条だ。なるほど、西欧近代国家における国民啓蒙の場が端緒ゆえ、その性格の存在は疑いえない。しかし、教育施設としての側面を自明視し、われわれは過度に強調してはいないか。もとより、何がそれほど教育の場と確信せしめるのだろうか。

本書によれば、その信条は、ミュージアムの研究者や専門家の言説によって多く補強されてきたようだ。この労作の著者は、メディア研究の視座からミュージアム研究に携わる——前述の研究者と同様に——越境的視点をもつ気鋭の研究者であり、本書で試みるのは、教育学の強力なバイアスがかかった従来のミュージアム研究における言説史を相対化し、新たに、メディア論や物質文化論からの再考を通して、今日のミュージアムの様態を記述するための新たな認識論的枠組みを提示することである。

著者の特徴として挙げるべきは、虚心坦懐にして、まさに秘事は暁なる、その着眼点の的確さと独自性だ。著者はまず、大胆にも、当該研究での聖域である「来館者」に批判の矢を向ける（一九頁）。すでに記号論と教育学との理念が絡み合い、「来館者」への執着が強化された中で、その外へと視線を運ぶ困難さは想像に難くない。著者が批判するのは、教育学のフィルターを通した視界は、「来館者」とはいえ、学習／鑑賞する者に制限され、その本来の豊かな実態を把握しえないことである。加えて、そもそも、「能動的来館者」自体が、すでに二〇〇〇年代以降の展示空間においては、メディアテクノロジーがもたらす変容の中で、認識枠組みとして失効していることだ。決定的な転機は「インタラクティブ展示」の登場であった。当初は主体的な学習促進の点で歓迎されたが、展示空間における「来館者」の裁量権をそれが拡大するうちに、もはや、「彼／彼女らの大半が共有するミュージアムの支配的な解釈そのものを想定することが困難」（二四七頁）となった。もとより、「能動的来館者」の存在や意義が記述しえたのは、何はともあれ、あの線条的に配置された支配的なメッセージが存在してのことである。この前提が崩れゆく今、ミュージアム研究には、教育学や記号論が変わる、新たな理論枠組みの構築が要請されている。

原点にもどり、まず著者が手がかりとして着目したのが、意味生成が行なわれる物質的な場としてのミュージアムだ。そこから「ミュージアムコミュニケーション」という「来館者が展示空間との相互作用を通じて意味生起する行為」（一七頁）を切り口として、過去の言説史を相対化し、「もう一つのミュージアム史」が描きだされる。現れたのは、メディアテクノロジー、法制度を含む社会状況、学術的知見の三者による関係論的な帰結としての、変貌するコミュニケーション像であった。

ならば、なにが一貫してミュージアムの意味を生み出す源となっているのか。「メディアはメッセージ」の格言もあるが、著者は、それがメディアであると指摘する。先の「もう一つの」歴史は、すでに、ミュージアムが常に同時代の最新メディアと共に合ったことを詳らかにしたが、灯台下暗し、肥大化した「来館者」像ゆえに、それは過去の言説が見落としてきた側面でもあった。

ここで「ミュージアムコミュニケーション」は「メディア論的想像力」によって新地平を得る。著者は、多様なメディアが立体的に配置されつつ、来館者もまた携帯メディアをもちながら回遊する展示空間を示した上で、その全体をミュージアムという一つのメディアとして描く。空間固有の文脈を反映しつつ発信される個々のメディアの重層的なメッセージに満ちた海を、来館者は身体性をもって回遊し、メッセージの意味を自らで編みかえていく。さらに、手にする携帯メディアからの情報発信が、ミュー

ジウムというメディアにフィードバックするのだ。これが「それ以上でもそれ以下でもない」(二八六頁)ミュージウムというメディアであり、その形式である。この実相を著者は「メディアコンプレックス」と名辞する。この複合体のシステムを記述のための「方法」とするとき、実証研究への可能性にも開かれていくことだろう。ともあれ、それが「来館者」の存在もまた包括する形式であることから、「来館者研究」の死が「メディアコンプレックス」によってあがなわれる日も近そうだ。

(女子美術大学・音楽文化論)

2017年8月31日執筆

評者：石井 拓洋

『図書新聞』（2017年12月9日付、3330号）のために

takuyo.ishii(a)gmail.com

光岡寿郎『変貌するミュージウムコミュニケーション：来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』

東京：せりか書房、2017年（6月9日第1刷発行）。